

# 札大生に 読んで ほしい本。



田中 恒寿 先生 法学部准教授

## 南フランスミステリー紀行

桐生操著

トラベルジャーナル/1997.6

[235.04 || Ki54]

2階書庫



まずはフランスという国に興味を持ってもらうための気軽な読み物から。著者が女性二人の共同ペンネームというところからすでにどこことなくミステリアスだが、はじめに断っておくと、この本はミステリー＝推理小説の舞台を巡る、といった趣のものではない。ここでいうミステリーとはまず「謎」であり、「伝説」である。たとえば何年前映画にもなったジェヴォーダンの獣や、レンヌル・シャトーのキリスト聖杯伝説や、サン・マルグリット島に幽閉されていた鉄仮面、などなど。その他にもサド侯爵が禁断の快楽を貪ったというラ・コスト城が出てくるかと思えば、数百年の美少年を虐殺したとされるジル・ド・レ男爵のティフォーージュ城まで、驚愕のエピソードとともに南仏(＋東西フランス)の旅が続く。上品で小粋なフランスのイメージががらりと音を立てて崩れていくこと請け合いだ。闇の部分に注目した南仏紀行であるが、小難しい話はない。グラスの香水やマルセイユのブイヤベース、リモージュの陶磁器など、定番のメニューも盛り込まれているので、口直しをしながら楽しんでほしい。

## フランス反骨変人列伝

安達正勝著

集英社/2006.4

[283.5 || A16]

第2開架閲覧室



子供の頃、テレビで時代劇を見るのが好きだった。『子連れ狼』もその中のひとつで、なぜ子供を連れて旅しているのか、そのへんの情報はすっぱり抜け落ちたままだったが、それなりに楽しんでた。主人公の挿刀は元首切り役人(公儀介錯人)だったが、フランスで死刑執行人といえバサンソン一家と相場は決まっている。しかし彼の地では、死刑執行人が副業として医師を営んでいるというから、驚いた。しかも名医としての評判が高かったという。ギロチン登場以前、人体のどこをどう扱えば死に導けるかを知悉する必要があるため、裏を返せば医の道にも通じることとなるのは当たり前といえ当たり前。だが、これはフランスならではの合理性だろう。死体を解剖して医学研究に励む挿刀など、ちょっとイメージしにくい。その死刑執行人を廃業した(首になった)6代目サンソンをはじめ、自分の妻をルイ14世の妾として召し上げられ(当時の社会では名誉なこととされていたが)、敢然と太陽王に闘いを挑んだモンテスパン侯爵、殺人者詩人ラスネールなど、一風変わった気骨の人物の生きざまがかなり詳しく描かれている。少々読み応えあり。

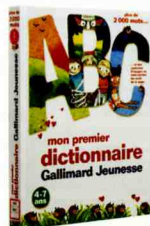
## Mon premier dictionnaire Gallimard jeunesse

2005

[R853 || Mo31]

参考図書閲覧室

日本の辞書作りは世界一ではないかと思う。内容の充実もさることながら、紙の質、印



刷、製本といったハード面でも群を抜いている。仕事柄フランスの辞書もよく買うが、印刷の薄いページがあったり、ページの裁断が乱れていたり、というケースが三度もあった。それはともかくとして、本国語を大切にするという点で、フランスは相当の実績と自負を持っている。当然、すぐれた辞書文化を長らく育んできた。日仏それぞれの最高峰の辞書を比較して云々という話はやめておくと、子供向けの辞書作りにかけては、フランスの情熱が一步まざっているように思われる。幼児(4~7歳)を対象にした入門レベルの辞書から始めて、小学低学年(6~8歳)向け、小学高学年(7~11歳)向け、中学生(11~15歳)向けと、きめの細かいラインナップが光る。札大図書館の辞書コーナーにも、中学生向けを除いて、それぞれMon premier dictionnaire Gallimard jeunesse、Le Robert benjamin、Dictionnaire Larousse juniorが置いてある。ちなみにこれら3冊の辞書で「右(droite)」という単語を引いてみると、共通して「心臓のない側」と否定概念で定義されている。あれっと思って「左(gauche)」を引いてみると「心臓のある側」という素直な定義だ。フランスは左優先の文化なのかと思うとさにあらず、「左」には「不器用」の含意がちゃんとある。参考までに日本語の辞書では「南に向いたときの西側が右、東側が左」式のニュートラルな(反面、頭でっかちの)定義が多かった。

暇な時に辞書をめくってみると、意外な発見があって楽しいものである。